様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：５２６０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７３０７２３

研究課題名（和文）　高専における発達障害のある学生の孤独感と所属集団の被受容感および自己効力感の変容

研究課題名（英文）　Loneliness and self-efficacy of students who have developmental disorder, and receptivity of class at KOSEN

研究代表者
黒田　一寿（KURODA KAZUTOSHI）
東京工業高等専門学校・一般教育科・准教授
研究者番号：60331998

研究成果の概要（和文）
本研究開始前の調査において，「高専は発達障害のある学生に対して親和的である」という話を度々聞いたが，これは非常に限定的な話であることがわかった。調査校ではクラスの「被侵害感」は入学後徐々に高かまっていくことがわかり，参与観察からもそのようなクラスで孤独感を感じてきた学生の過去が語られた。良き友人を得られるケースももちろんあるが，今後，高専はクラス集団育成の面に力を入れる必要があるだろう。

研究成果の概要（英文）
Teachers from different colleges of technology say, "Our class community is comfortable with students with developmental disorder." However, it is too optimistic. According to our survey, the "feeling of disregard" is higher in students who just enrolled. Also, during a participant observation, a student talks about his "loneliness" in the past. These results lead us to conclude that we need to improve class communities in every college of technology.

交付決定額

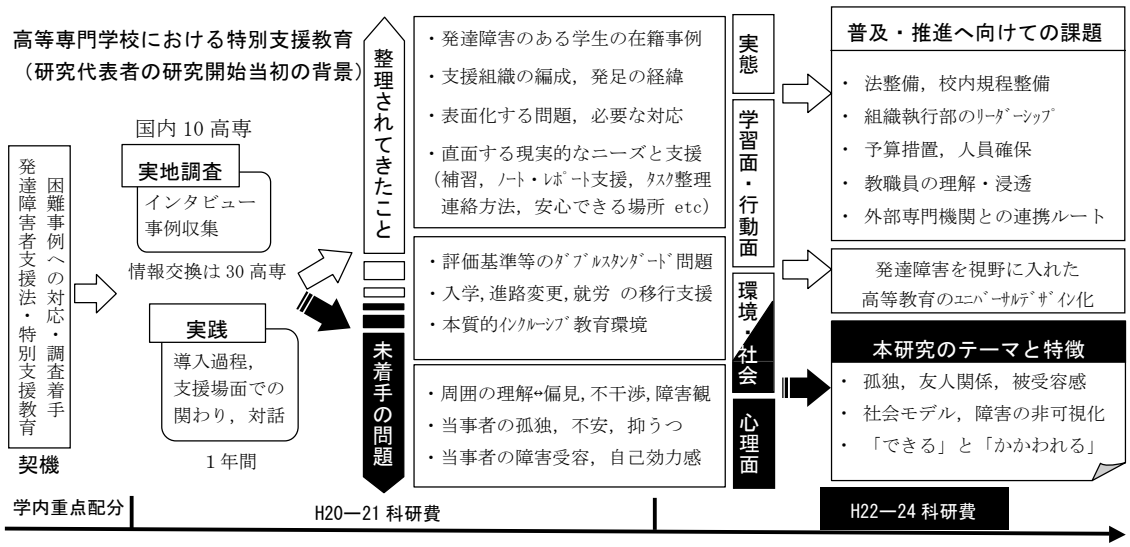
（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：集団特性，発達障害，特別支援，孤独感

１．研究開始当初の背景

本研究の申請時点において，高等専門学校（以下「高専」と略す）における発達障害のある学生を取り巻く状が徐々に明らかになりつつあった。本研究代表者は，平成 20 年～平成 21 年にかけて科研費による支援を受けた調査（「実地調査に基づく技術者教育における発達障害のある学生への支援モデルの構築と検証」，種目:若手 B，課題番号:20730573）を行い，全国の高等専門学校を訪ね歩き，発達障害のある学生の支援にあたっている教職員の「生の声」を収集した。これらは論文「高専における発達障害のある学生への支援をめぐる諸問題」（「高専教育」，第 34 号，2010）にまとめ，報告している。この実地調査から，高等専門学校における発達



障害のある学生の在籍状況，当事者学生の抱える「困り感」，支援の状況，支援者が抱える問題および支援体制構築の状況や課題等が見えてきた（上図）。また，先行研究，日本学生支援機構や国立高等専門学校機構他の調査からも，発達障害のある学生の在籍数や支援状況に関する統計が示されている。

発達障害のある学生の中には，レポートの作成や提出物の期限を守ることが難しく，学業不振に陥り，学校生活へのモチベーションを著しく落としてしまう者がおり，明らかに特別なニーズが存在することが明らかになっている。これに対して，予算措置，人材や支援組織の整備といった課題は残るものの，既に多くの高専において，学習支援や合理的配慮の検討がなされている。先行して支援活動に取り組んで来た高専の情報が共有され，これを手本に多くの高専で同支援が始まろうとしている段階である。

一方，本研究が焦点を当てたのは，当事者である学生の「孤独感」である。これは，発達障害のある学生が抱える問題として大きくは表面化しないディテールであるし，従来の「支援」の枠組みには明確に与されていない部分ではないかと思われる。本研究では，支援活動の実践を通して当事者の声を聞き，同時に彼・彼女らが身をおく社会「クラス集団」の特性にも注目しながら（上図の黒地白抜き字部分），これにアプローチを試みた。

２．研究の目的

「ちょっと変わった学生もいつのまにかクラスに受け入れられ，居場所を得ている」
本研究代表者は，本研究に着手する前に行った前述の実地調査研究において，このような声を高専の教職員から度々聞いた。やや楽観的とも思えるこうしたイメージは，その実，義務教育以降の学校や教員に潜在する適格者主義と相まって，個別な配慮や特別な支援の不要論，「特別扱い」への抵抗感，発達障害への無理解の一因ともなってきた。

一方で，他者から一定の理解や温かさや承認をもって受け入れられているという被受容感は，安心して学校生活を送り，対人関係を発達させるための土壌でもある。この土壌を十分に耕やすことによって，対人関係，コミュニケーションやこだわりの強さを主とする自閉症スペクトラム圏の「障害が可視化されないケースも有り得るのではないか？」との仮説も成り立つだろう。さて，本当に「高専」は発達障害のある学生にとって「受け入れられやすい」受容的な環境なのだろうか？

そこで本研究は，発達障害のある学生が青年期に抱える孤独感，友人関係の難しさに焦点を当て，次のような点についてアプローチを試みた。

1) 発達障害のある学生が青年期に抱える孤独感，友人関係の難しさを明らかにする。

2) 高専におけるクラス集団の集団特性が醸成される過程に注目し，それが発達マイノリティに対して本当に受容的な集団特性を有していると言えるのか検討する。

3) 全ての学生を対象とした「理解→受容→共生」教育と個別支援が並進する特別支援教育の実践を目指しつつ，当事者学生との対峙から，そうした活動が当事者にどのように受け止められているのか検証する。

4) 発達障害のある学生の「できる」と「かかわれる」という自己効力感変容の文脈を読み解く。

このような問題意識を持ちながら，調査，支援活動の実践，事例の検討を行うことで，

発達障害のある学生への支援における心理・社会的側面の課題を明らかにする。

３．研究の方法

本研究では，質問紙調査，実践研究，質的研究法を組み合わせることによって，研究目的に総合的にアプローチすることを試みた。

(1) 質問紙調査

クラス集団の特性を抽出する目的で質問紙調査を行った。ただし調査対象について，研究計画段階では複数の高専に在籍する学生を対象とする予定であったが，2011 年 3 月の東日本大震災に伴う混乱により，協力予定校と歩調を合わせて調査を実施することが非常に困難になり，計画の変更を余儀なくされた。よって他高専については，質問紙活用に関する情報交換のみを実施し，これを調査の資料とした。

本研究における質問紙調査の目的を再確認すると，それは，実地調査の際に度々聞かれた高専の「受容的なクラス集団特性」の真意を確かめることであった。そこで，前述の現状制約も踏まえ，調査対象を本研究代表者の勤務する高専に絞り，反復して調査を行うことによってクラス集団特性の醸成過程に注目することとした。

最終的に，平成 23 年度・平成 24 年度の 1 年生を対象とした 4 月末・7 月初旬・12 月中旬の 3 回にわたる反復調査を始め，のべ 1,500 人を対象に Hyper-QU[1] および「困り具合に関するセルフチェックリスト」[2] を中心とした質問紙調査を実施した。

(2) 実践研究

研究代表者の特別支援コーディネーターとしての活動を始めとする種々の支援実践を主フィールドとして，発達障害のある学生への支援事例，およびその活動を通しての当事者学生との関わりを記録した。また，発達障害学生支援に関する研修会や研究会の記録や資料を整理し，コーディング可能な状態にまでデジタル化した。

加えて「共生教育」の一環として実施した「障害」に関する授業の記録も行った。

(3) 質的研究

発達障害のある学生が青年期に抱える孤独感や友人関係の難しさへのアプローチ方法として，質的研究方法を採用した。

面接や支援実践場面における記録（フィードノート）や，教室場面でのビデオ記録，電話や電子メールのやり取りなど多種多様な定性的データを整理するために QDA(Qualitative Data Analysis)ソフトウェア[3]を用いた。また，ビデオ資料については，象徴的場面をスクリプトに起こした上で，「孤独感」「受容」「自己肯定感」といった分析のテーマに関連した箇所に着目し，ビデオエスノグラフィ的手法を用いて考察を行った。

【脚注】

1)Hyper-QU,河村茂雄著，図書文化社

2)発達障害のある学生支援ケースブック，国立特別支援教育総合研究所，2007

3)NVivo10，QSR International

４．研究成果

(1) 高専における１年生クラス集団の分析

調査に用いたアンケートツール Hyper-QU の尺度構成を以下に示す。

◇学級満足度尺度
- ├ 承認（友だちや教師から認められているか？）
- └ 非侵害（いじめ・冷やかしを受けていないか？）

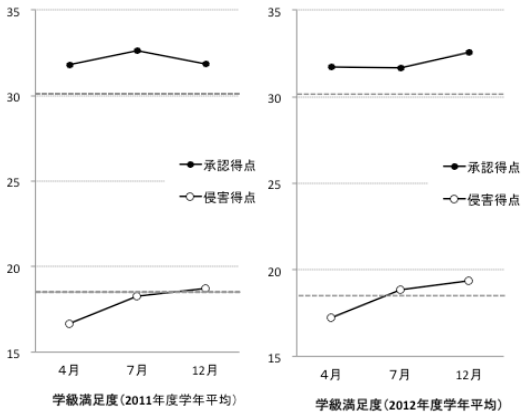
◇学校生活意欲尺度
- ├ 友人との関係（気軽に話せる友人がいるか？）
- ├ 学習意欲（勉強に進んで取り組んでいる？）
- ├ 教師との関係（先生とうまくいっている？）
- ├ 学級との関係（仲のよいクラスだと思うか？）
- └ 進路意識（興味をもっている職業があるか？）

◇ ソーシャルスキル尺度
- ├ 配慮（対人関係の基本的なマナーやルール）
- └ かかわり（人とかかわるきっかけや関係の維持）

◇参考資料（悩みに関する質問項目）

2011 年度および 2012 年度の研究代表者勤務校において，１年生を対象に，４月末・７月初旬・12 月中旬の３回にわたり，このアンケートを反復して実施した（2011 年度：N = 214，2012 年度：N = 214）。

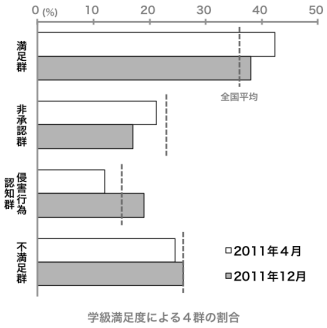
ＱＵ尺度のうち，「受容的なクラス集団」であるかを推測しうる尺度として，承認得点と被侵害得点が挙げられる。その経時的変化を下図に示す（点線は全国平均値）。



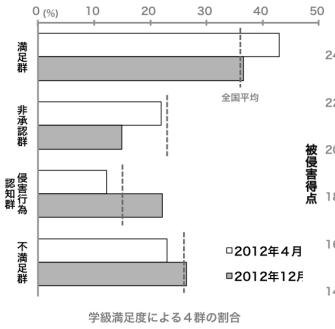
いずれも，全国平均値（全国平均値は図書文化社情報センターより入手，サンプル数約２万人）と大きな開きはないものの，侵害得点において４月から 12 月にかけて有意な上昇がみられた。

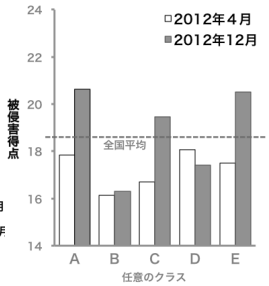
承認得点と侵害得点を２軸として，全国平

均値をもとに回答者を４群（満足群，非承認群，侵害行為認知群，不満足群）にカテゴライズし，その割合を示したものが下図である。

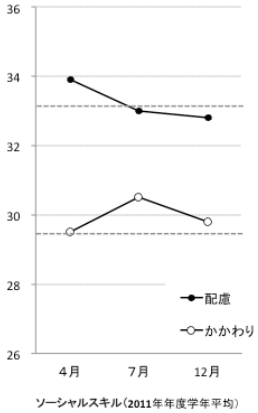


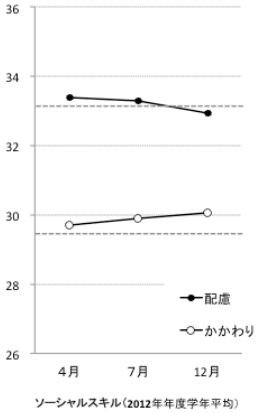
入学１ヶ月後の４月時点では満足群の割合が全国平均を有意に上回るが，12 月には満足群と非承認群の割合が低下し，侵害行為認知群の割合が増加する傾向が見られた。





つまり，全体的な傾向としては冷やかしやからかい，悪ふざけを受けていると感じる度合いが時間と共に上昇することを示している。ただし，被侵害得点の上昇傾向はクラス間の差が大きい（上右図を参照）。ルールに緩みがみられるクラスでは，一方的に話してしまったり，こだわりが強かったりする傾向のある自閉症スペクトラム圏の学生が侵害行為を受けることも懸念される状況と言えよう。

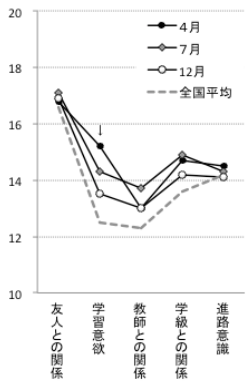


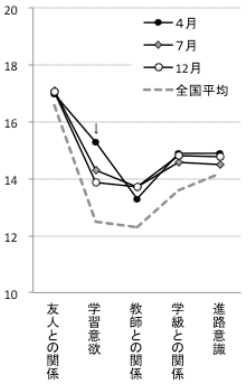


上図はソーシャルスキルの学年平均値を示したものである。2011 年度は「配慮」の値において４月から 12 月にかけて有意な低下がみられた。2012 年度は有意な差ではなかったが，やはり平均値としては下降が見られる。

学校生活意欲尺度をみると，この高専の１年生は，全般に高い学校生活意欲をもって過ごしていることがわかる（下図）。

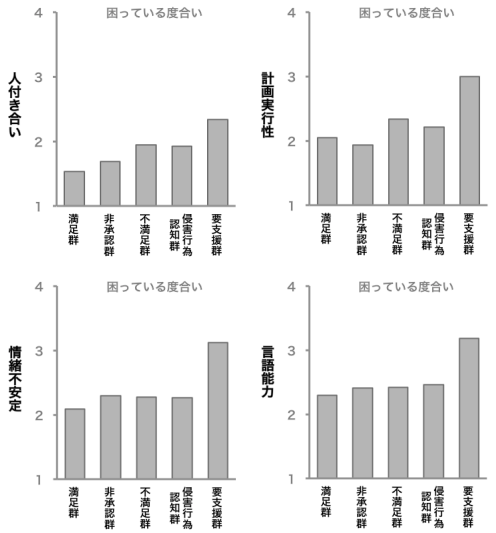
経時的な変化として最も著しいのは「学習意欲」であり，入学時点で非常に高かった学習意欲が，およそ半年あまりで大きく低下する傾向がみられた。また，「学級との関係」と「教師との関係」はクラス間における差が大かった。





「困り具合に関するセルフチェックリスト」は，もともと発達障害のある学生のスクリーニングや困り感を把握するために作成されたものである。本研究では調査結果を要約するためにこれを因子分析にかけ，「人付き合い」「計画実行性」「情緒不安定」「言語能力」の４因子を抽出した（困り感に関する因子）。ＱＵでは，不満足群に位置する学生の中でも特に承認得点が低く同時に被侵害得点が高い者を要支援群としている。前述の４群にこの要支援群を加えた５群において，困り感に関する因子を比較したものが下図である。

ＱＵの結果において要支援群に入ってくる学生（発達障害のある学生についても要支援群に入っているケースが散見される）は，困り感に関する４因子いずれにおいても，他群の学生より困っている度合いが有意に高かった。



今回調査対象とした高専のクラス集団を概観すると，入学直後には満足度が高い学生が比較的多いものの，時間とともに被侵害感が上昇し，クラスによっては冷やかしやからかいの多さが心配される状態も見られることが明らかになった。つまり，少なくとも入学後自然発生的に，継続して受容的なクラス集団の特徴が見られるわけではないと言えよう。

(2) 発達障害のある学生の孤独感

本研究では，発達障害のある学生が抱える孤独感について，当事者である学生の語りや彼/彼女を含む「場」の現象を収集し，検討を加えていった。本報告書では，個人情報保護に配慮した上で，いくつかの象徴的な事例を取り上げる。

なお，事例の記述にあたっては，個人を特定されることのない程度の改編を加える。

①「空気を読めない人」が生まれる状況

下のスクリプトは参与観察の場面を記録したビデオから起こしたもので，ある授業の冒頭部分である。教師がその日の課題の進め方を説明した後，ある学生Ａ（自閉症スペクトラム傾向のある学生）からの質問に答えている。

この場面では，課題の手続きが非常に煩雑で，学生Ａが質問している内容は，確認がなされて当然の内容である。決して見当違いな質問ではない。一方で，他の学生には「手順も書いてあるし，やっていくうちに分かるだろう」という楽観的な見通しがあるが，学生Ａにはきちんと確認してから始めたいとい

人物
教師，　学生Ａ，　学生Ｂ，　学生Ｃ，　その他(ビデオの音声からは特定できない判別不能の音声)

01　教師　：　質問がある人?
02　学生Ａ：　((挙手))
03　教師　：　はいどうぞ

04　学生Ａ：┐　相互レビューって[　　表の:[　これ全部足すと６０点になるってことですか?
05　教師　：┘　　[はい　　[はい

06　教師　：　はい，　表は全部足すと６０点になります.
07　学生Ａ：　=でうら　うら　うら　が，これ４０点満点ってことですか
08　教師　：　=そうですここが４０点です.　で，この４０点分は計算しなくて結構です　僕があの:　あ　集計しますので，みなさんが集計するのは６０点分.　いいでしょうか?
09　学生Ａ：　=え　こっちは　わた　わたしたちが:，何か書く必要はないと.
10　教師　：　=いや　これは:，　それぞれの，　はっ　班の発表に対して１から４をつけていく.
11　学生Ａ：　それだけ:?

12　教師　：┐　=それだ[け.
13　学生Ａ：│　　[え　じゃ　合計点を書く必要はない?
14　その他：┘　((少しだけざわつき始める))

15　教師　：　=合計点も書いてください　一応　確認のために.　はい.　マークをしてください.　マークそいで最後はマークをしてください.
16　学生Ａ：　残りの４０点は先生がつけるってことですか
17　教師　：　=ええ　つけるというか　集計する.　ということです.　つけるのはみなさんだけども集計するのは僕.

18　学生Ａ：┐　=とわからないです
19　その他：│　　[((急にざわつく　「わかんだろ」という声がする))
20　教師　：┘　　[えっと　　ひとりひとが，　ひとりひとりが，

21　教師　：┐　１から４までの間でつけていく.　つけていいんです.　点数をつけます.
22　その他：┘　((少しざわめきが残っている))

23　教師　：　=で，　平均点を出すためには，　みんなの合計点を計算しないといけないでしょ
24　学生Ａ：　=°はい°
25　教師　：　=それは僕がやるということ.　　わかる?
26　学生Ａ：　あの　>２０点から３０点の間の，　なんで６０点（　　）かわからない<

27　教師　：┐　=あ　それは，これ　全部４点をつけると，甘過ぎというふうに判断するわけです
28　その他：┘　　((ざわめきのなかに「あー」ため息が聞こえる))

う欲求があり，言い換えれば「わからないものをわからないままにスルーできない」こだわりもあるようだ。しかし，スクリプトの途中で，クラスの中から誰ともなくため息が聞こえ始め，学生Ａのこだわりに対するフラストレーションは，ついに「わかんだろ」というような批判的な態度の表明に至る。

ＱＵによる量的調査に現れた「被侵害感」の上昇は，このような日常の場面が重なっていくことで醸成されてしまう。本研究で参与観察の対象とした学生の半数以上が，高い被侵害得点を示していた。

②語られた過去の被侵害経験の事例

最終学年に在籍するＤくんは，調査者との面談の中で，過去にクラスメートから受けた行為について語った。「じゃまだ」「あっちいけ」などという辛らつな言葉を浴びせられた経験があることや，度々無視され疎んじられたことを語った。また，彼はそうした寂しさや孤独感を紛らすかのように，ノートの落書きの中にあるキャラクターを生み出し，名前をつけ，友だちと称していた。彼のＱＵにおける侵害得点は最大値に近く，不適応を起こしていた時期もあった。

支援活動の中で，Ｄくんは彼が得意な数学を１年生に教える機会があり，彼は「もっと前からこういうことをやっとけば良かった」と感想をもらした。それは，決して彼が一方的にコミュニケーション不全なわけではなく，一定のルールと配慮のあるシチュエーションであれば，同世代の者たちとも付き合っていけることを示していた。

③強いこだわりが育む友情の事例

ここでは象徴的な例としてＥくんのケースを報告する。Ｅくんはアスペルガー症候群の診断を有しており，中学時から通級学級等の支援を受けてきた。支援者は定期的に面談を継続してきたが，友人関係のトラブルが語られることはほとんどなかった。むしろ，「高専にはマニアックな人が多い」と言い，彼が収集している古いゲームについて一緒に盛り上がれる友人がいることを喜んでいた。

ただし彼は勉学についての劣等感を抱えており，高専に対する愛着と反比例するように，課題の提出や成績の面に困難を抱えていった。数回の留年が重なり，ついには進路変更をせざる得ない状況になった。保護者は学習面での支援を望んだが，学習障害のような顕著なディスアビリティーがみられるわけではないＥくんの場合，結局，学校側から有効な支援を受けるには至らなかった。

(3)まとめ

本研究を通じて，少なくとも調査校では「高専の受容的なクラス集団特性」というものは認められず，入学後，クラスによってはむしろ「被侵害感」の上昇がみられた。参与観察からは，そのようなクラスで辛い経験をした学生の過去も明かされた。また，ビデオエスノグラフィー手法により，教室で生まれる「空気が読めない人」という現象にアプローチを試みた。今後，本研究の成果をさらに検討し，支援者が考えるべき心理・社会的支援について研究と提案を続けて行きたいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 黒田一寿,「Q-U を用いた学級集団の分析」，東京工業高等専門学校研究報告書，第 44 号（1），23-32p,2012，査読無し

② 黒田一寿,「Q-U を用いた学級集団の分析（その２）」，東京工業高等専門学校研究報告書，第 44 号（2），27-36p,2013，査読無し

〔学会発表〕（計１件）

① 黒田一寿,「健康に関する授業の設計(身体分野)」，全国高専教育フォーラム，2012 年８月,国立オリンピック記念青少年センター

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

https://sites.google.com/site/kazutoshikuroda/research-work

６．研究組織

(1)研究代表者

黒田 一寿（KURODA Kazutoshi）

東京工業高等専門学校 一般教育科准教授

研究者番号：60331998

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし